東京新聞（夕刊）　2010年（平成22年）7月5日（月曜日）　©中日新聞東京本社2010　（日刊）

東京新聞
夕刊
中日新聞東京本社
東京都千代田区内幸町二丁目1番4号
〒100-8505　電話 03(6910)2211

物の上に紙を置き、色鉛筆でこすって写し取る「フロッタージュ」という美術技法を使い、工場や商店の看板など地域の記憶を残すプロジェクト「町の記憶」が13日、東京都荒川区の南千住地区で始まる。商店街の若手経営者らと美術作家が連携。小学生を含む地域住民が参加して2年間に1万枚の〝記憶〟をこすり取り、大きな会場を借りて展示する計画だ。「新しく来た人も、地域外の人もぜひ参加してほしい」と呼びかけている。（社会部・中里宏）

〝こすり取る〟南千住の記憶

消えゆく工場、商店の看板…

酒百さんによる工場の床のフロッタージュ（中央）。床に打ち込まれた雌ねじの跡や凹凸が写し取られている＝東京都荒川区で（海老江重光さん撮影）

南千住地区は隅田川が近く、明治期から製紙工場や紡績工場、町工場が多かったが、時代とともに、ものづくりの町の面影は姿を消しつつある。

南千住七丁目のコツ通り商店街で理容店を経営し、写真家でもある海老江重光さん（三九）は、町の姿を残したいと思っていた。昨年、知人の美術作家で東京工芸大准教授の酒百宏一さん（四二）＝大田区在住＝が、新潟市で五千枚のフロッタージュ作品を展示する市民参加のワークショップを開いたのを知り、「南千住の記憶を地域ぐるみで参加するフロッタージュで残したい」と依頼。酒百さんも快諾した。

地元の仲間たち十人とプロジェクトのための団体「千住　すみだ川」を発足。NPO法人化を目指す。フロッタージュに使うケント紙と展示のための台紙は、南千住にあった千住製紙の流れをくむ日本大昭和板紙が趣旨に賛同して提供する。

住民らがプロジェクト

十三日は、南千住七の工場跡で、地元の小学生と保護者の計約八十人が工場の床や柱、機材などをB5のケント紙に写し取り、自分の名前を書く。工場は一九〇三年創業で、製紙会社などが使う機械を製作していたが今年閉鎖。八月には大規模マンション建設で取り壊される予定だ。この後、千住大橋や商店街、素盞雄神社を回る。一般参加もできる。

「フロッタージュは写真に写らない微細な特徴も実物大で残すことができる。南千住に来たことがない人も参加してほしい」と海老江さん。酒百さんは「南千住は隅田川、貨物線、日光街道などが交わる物流の要だった。場所ともの、人のつながりを表現していきたい」と話す。

問い合わせは同NPO準備室＝電03（3801）3428＝へ。

東京新聞・夕刊（東京）
2010年7月5日（月）
１面